

異郷の煌姫

デルフィニア戦記5

茅田砂胡

中央公論新社



目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

地	タイトルロゴ・マークデザイン	カバーデザイン	挿	口	カバーイラスト
図	水野デザインルーム	しいばみつお (伸童舎)	画	絵	沖 麻実也
	斎藤由加				

目次

1	—————	9
2	—————	28
3	—————	51
4	—————	77
5	—————	99
6	—————	126
7	—————	139
8	—————	162
9	—————	183
10	—————	201
あとがき	—————	212



アスティン◎ティレドン副騎士団長。バルロ団長の名補佐役。

ガレンス◎ラモナ副騎士団長。

カーサ◎王宮内にあるサヴォア公爵家に仕える執事。

ジル◎タウの自由民を束ねる頭目。

ブラン◎独立騎兵隊士。

シェラ◎王宮に仕えることになった女官。

マグダネル◎先代サヴォア公爵の弟。サヴォア一族の中でも強大な力を持っている。

ドゥルーワ◎先代デルフィニア国王。10年前に逝去。

アエラ◎ドゥルーワの妹。ドゥルーワ在位中、大貴族であり右腕でもあったサヴォア公爵に嫁ぐ。バルロの母。

レオン、エリアス、ルフィア、エヴェナ◎ドゥルーワの嫡出子。すでに全員逝去。

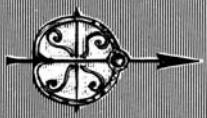
グライア◎ロアで黒主と呼ばれていた野性の悍馬。リィを認め、乗騎を許す。

ゴルディ◎パキラ山脈ルブラムの森に棲む狼。

CAST

- ウォル（ウォル・グreek・ロウ・デルフィン）◎デルフィニア国王。庶子であったため、一度はその地位を奪われるも多く味方を得て再び王冠を被る。統率力に優れ、無私公正。戦士としても優秀。
- リィ（グリンディエタ・ラーデン）◎異世界からきた少女。華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。ウォルの王権奪回に類を見ない活躍を示し、戦女神と讃えられる。内乱平定後、ウォルの養子となり、現在はデルフィニア王女。
- バルロ◎国内の名門サヴォア一族の当主で、父の跡を継ぎ公爵となる。ティレドン騎士団長。ウォルの従弟で短気な毒舌家。ウォルを早くから支持し、内乱時には敵方によって国王に祭りあげられるが固持し続けた気骨の持主。
- イヴン◎独立騎兵隊長。ウォルの幼なじみ。タウの自由民。
- ナシアス◎ラモナ騎士団長。公爵としてのバルロを抑えられる奇特な主。
- ドラ◎将軍。名馬の産地として名高いロアに領地を持つ伯爵。ウォルの養父フェルナン伯爵の親友だった。
- シャーミアン◎ドラの嫡子。女騎士。
- ブルクス◎宰相。先王時代には優秀な外交官として仕えていた。内乱時には侍従長をこなし、デルフィニアの裏も表も知りつくしている。
- カリン◎女官長。ウォル生誕当時、生母ポーラに味方しウォルを暗殺から救った。

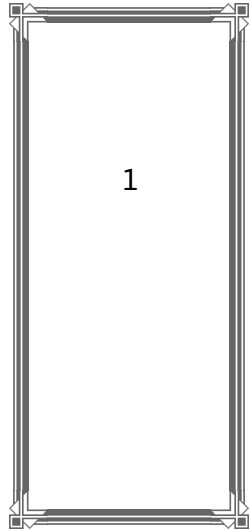
大華三国図



異郷の煌姫

デルフィニア戦記 5

Definarian Wars
A RECORD OF THE



1

その日は朝から王女が本宮に下りて来た。

王宮の朝は早い。まだ暗いうちから女たちを中心に一日が動き始めている。

女官長のカリンはとりわけきびきびと働きながら女たちを監督していたが、王女の姿を認めて目を見張った。

「おや、お珍しい」

そんな言葉が口について出るほど、この人が自分から本宮にやって来るのは稀なことである。

「おはよう。あれはどうした？」

「今朝はまだ起きて来られません。ご寝所ではございますまいか」

「そうか。ちよつと早すぎたか」

「お待ちになりますか？」

「いや、起こしに行く。急ぎの用らしい」

王女の言う『あれ』とは国王のことである。

他の者ならこんな物言いは絶対に許されない。カリンも許さないのだが、いつものことである。このごろでは言っても無駄と諦めてもいる。黙って頭を下げた。

デルフイニア王宮、コーラル城はパキラの山腹から平地にかけて造られ、下から三の郭、二の郭、一の郭の三重構造になっている。その一の郭のもつとも奥まった位置に見事な白い姿の本宮が建てられている。本宮だけでもはなはだしく広い建物だが、勝手を知りつくしている王女は案内も待たずに国王の居室に向かった。

デルフイニアの国王、ウォル・グリークはその育ちのせいもあって大仰なことが好きではない。

隣国パラストのオーロン王などは家族の一員だろうと、その顔を見るまでにくつかの取次を経なければならぬ場合もあると言うが、ウォルの場合には外からの賓客ひんきやくに会う際、多少の体裁を整える程度である。国王の寝間は誰でも通れる廊下を入れておくのところに設けられていた。そのほうが便利だというのが当の国王の弁である。

不用心に過ぎるといふ意見もあるが、寝所の横には控えの間があり、人が詰めている。夜間の見張りと、目を覚ました国王の用事を果たすためだ。

王女の姿を見て、詰め所にいた兵士も侍従も一斉に頭を下げる。

王族の女性ならばここで立ち止まり、自分が来たことを陛下に伝えてくれと言うのが順当だが、王女はかまわなかった。平伏した家来たちの横を平然と通りすぎて国王の寝所に入ってしまった。

ほとんど足音は立てなかったが、たとえ熟睡していたとしても、扉の開く音だけで国王は目を覚ましただろう。家来に守られて眠っていても感覚の鋭い男だ。

実際にはもうすでに起き上がって、部屋着に袖を通したところだった。

王女の姿を認めて笑顔になる。

「おお、早いな」

「至急会いたいと言ってきたのはそっちだぞ。あの置き手紙はいつのものだ？」

「一昨日おとといだ。もつと待たされるかと思つたが、二日ですむとはありがたい」

本来、王女などというものは父である国王の許可なしには自分の居城を一步も出られないはずなのだ。が、この王女にそんな常識は通用しない。

今の住み処である西離宮は本宮のはるか背後のバキラ山腹に建てられており、使われなくなつて久しいこともあり、下手をすると昼日中でも狼が現れる

ような場所だ。よほど屈強な男でも一人で夜明しするのはごめん被^{こむ}ると臆病からでなく言うだろうが、王女はその離宮で召使も置かずに暮らしている。

それだけならまだしも、行き先も告げずに実に頻繁にいなくなる。獣の姿が濃く、地元の獵師たちでさえ足を踏み入れるのをためらうパキラ山中を自在に歩き回り、時には一人で国境を越えたりもしているらしい。半月近くも離宮を留守にすることもしばしばである。

そうなると場所が場所であるだけに使者を残しておくわけにもいかず、結局はなはだ頼りない手段ながらも置き手紙を残しておくしか方法はないというわけだ。

「いつぞやのように十日も待たされるのではないかとひやひやしたぞ。今度はどこをほつつき歩いていた？」

王女はこの問いには笑って答えなかった。

「それより、急用というのは何だ」

「まあ、待て。その前に腹ごしらえにするとしよう。お前もどうだ？」

「もらおう。腹ぺこなんだ」

城の者たちはこの風変わりな王女にもだいたい慣れたのだが、知らない者はいまだに腰を抜かさんばかりに驚く。

特に城下から奉公にあがって来た若い侍女たちがそうだ。

城下の娘たちもむろん王女の噂は聞いている。一種のあこがれを抱いてさえいる。生まれ素姓が貧しくとも国王にその美しさを見いだされ、嗜れて王女に迎えられたおとぎ話の主人公としてだ。

しかし、本人を目の当たりにした時、おとぎ話と実物との激しい落差に娘たちは絶句する。

デルフィニアの王女は身なりを整えて黙って座ってさえいれば文句なしの美少女である。これは間違いない。もう五年もすれば絶世の美女と言われてもおかしくない。

問題は、この王女は美しい衣裳などには目もくれないし、黙って座っていることなど夢のまた夢だということだ。

飾りらしいものといえば額に置いた銀の冠ひとつである。櫛くしを入れれば黄金のようなつやを放つはずの髪はくしゃくしゃにまとめあげられ、すらりとした体を山岳民のような皮の胴着に包み、形のよい腕には裂いた麻布を巻きつけている。長ズボンはを穿いた膝から下にも同様に荒織りの麻布を巻きつけ、土に汚れた皮の短靴を履いている。おまけに腰には常に長剣を差している。

この格好で平然と本宮内を闊歩し、国王を捕まえてはぼんぼんやるのだから、知らない者があつけにとられるのも無理はない。

今もカリンに従って朝食の膳を運んで来た若い侍女が一人、国王と語り合う王女の姿を見て立ちすくんだものである。

城へあがったばかりの娘で不幸にも今まで王女の

姿を見たことがなかったらしい。

「山賊の少年が陛下のお寝間に忍びこんだ……」

そう思ったらしい。

先導してきたカリンが一瞥いちべつをくれたので、慌てて立ち直り、ぎこちない手つきながらどうにか食膳を並べて、他の侍女と下がって行った。

「驚かせたらしいな」

「無理もない」

二人は給仕をする女官たちも下がらせ、しばらく互いの近況を報告しあつた。

そうして国王は少し言葉の調子を変えて言い出したのである。

「実は、マレバから少々、厄介なことを言ってきたな」

「バルロがどうかしたのか？」

国王の従弟いとこであり、サヴォア公爵の称号を持つノラ・バルロは、マレバに本拠を置くティレドン騎士団の長でもある。

国王のもっとも近い親族として、また腹心の味方として知らぬ者はない重要人物だ。

「また人妻と火遊びでも始めたとか」

「それなら放っておく。従弟どのは俺と違って火遊びの達人だ。火種をつけるのもうまいが後に残らぬように消すのもうまい」

王女が思わず吹き出した。

俺と違って、とわざわざ断るのがおかしかった。

デルフィニアの国王、ウォル・グリークは二十七歳になる。よい施政を布くことで知られ、名立たる剣豪でもある。端正な顔立ちに穏やかな黒い瞳とつやのある同色の髪をし、鍛え抜かれた豊かな長身は見事なまでの均整を誇っていた。

堂々たる美丈夫だが、いまだに独身である。

その『娘』である王女は十六歳。名はグリンディエタ・ラーデン。前述したように眩しいほどの金の髪と鮮やかな深い緑の瞳を持つ男装の少女だ。

国王とはむろん実の父娘ではない。

もとの素姓は誰も知らない。ただ、三年前の内乱において戦女神いくさめがみもかくやという働きを示し、国王のたつての請いで王女として迎えられたのだ。

人々はこの思い切った手段に驚愕し、一部のもの間では国王はあの少女に迷ったのではないかともことしやかに囁かれたものだが、二人ともこの噂をいっしょう一蹴している。

国王は王女のことを、

「俺の同盟者だ」

と言い、王女は王のことを、

「おれを女あつかいしない貴重な男だ」

と言う。

当然、言葉のやり取りもまともな親子のものとは程遠くなる。

今も王女はいたずらっぽく笑って言った。

「シッサスでもお前の王妃は誰になるのか、噂の種になつてるぞ」

「なんだ。お前、あんなところに出入りしているの

か」

「ああ、おもしろい。大陸中からいろんな人間が集まってくるからな。珍しい話が聞ける」

「しかし、いくらお前でも若い娘がシッサスに足をむけるのはあまり感心せんな」

「それさ。このなりだと誰もおれを女だと思わないらしい。おかげで妙に女の人にもてる」

今度は国王が吹き出した。髪を隠してしまえば、グリンダ王女は颯爽とした少年に見える。玄人の女たちがいたずら心を起こして誘いをかけるのだろう。「おれはもちろん、そのお誘いに乗るわけにはいかないんだけどな。よかつたらそつちへ譲るぞ」

「馬鹿を言うな。国王が下町へ出かけて女郎買いなどしてみる。いい物笑いだ」

さらりと云った国王だった。実際、中央全土にその名を知らしめている英雄にしては、この国王は色事方面にあまり興味を示さない。当のバルロ、そして国王の幼なじみであり悪友でもあるイヴンはそれ

を心配しているのか、何かというと国王に女性を近づけようとする。

一度、イヴンとともにシッサスにお忍びで出かけた国王はそれこそ両手にあまるほどの華やかな娼婦たちに取り囲まれ、強引に迫られて慌てて逃げ出して来たらしい。かと思うとバルロの紹介だという貴族の美しい奥方が何人も、熱心に国王に言い寄ってくる。

若い、独身の国王に女たちが目の色を変えるのも無理はないが、その後ろで二人が糸を引いているのは明白である。

することは同じでいながら、二人とも互いのことを快く思っていない。

「だいたいスーシャの田舎で育ったあいつに、貴族の、しかも人の女房なんかを押しつけようたって無理な話だ。据え膳食わぬは何とやらっていうのはそれこそ騎士団長みたいな女たらしに当てはまることであって、いくらお膳立てしようがあんな朴念仁

が素直に据え膳に手を出すもんか」

と、イヴンが毒づけば、バルロも負けていない。

「昔がどうあれ、今の従兄上はこのデルフィニアの国王なのだぞ。愛妾にするのはもちろん、たとえ戯れに鬪るにせよ、下町の娼婦などかつに近づける馬鹿があるものか。下層の男たちばかりを相手にしている女どもだぞ。悪い病でも持つていたら何とする。取り返しのつかないことになるではないか」

どちらの言い分にも一応の理は通っているようだが、なんのことはない。どちらの調達した娘が国王の意に添うかを密かに競っているのである。

こうしたことを王の耳に入れたのは他でもない、グリンダ王女だ。

「もてる男は何かとたいへんだ」

からかつていのか本気なのかわからない口調と顔つきで言われて、王は苦笑したものだ。

「俺として木石でできていてはわけてはないが、ああも強引に押しつけられるのは気が進まん。それだけな

のだがな。困ったものだ」

国王がいまだに独身であることを一部の家臣が憂えているのは確かである。有力な国家の中から適当な姫君を選ぼうとする動きもあるが、王の結婚はすなわち政略である。どこの国家を選ぶか、国王としては慎重にならざるを得ない。

そうなる、せめて側室でもと思うのか、今度は国内の貴族がそれぞれ自分の目をかけた娘を売りこんでくる。

しかし、国王はこちらにも慎重だった。そのまま臣下たちの勢力争いに発展しかねないからだ。

「ましてや、あの二人の紹介してくれる娘たちにはうかつなことはせんほうがいいな」

顔を合わせれば火花を散らしている従弟と友人に、国王は苦笑して言ったものだが、王女も奇妙な笑みを浮かべながら頷いたものだ。

「同感だ。選ばれなかったほうが嫉妬のあまり何をするかわからない」

選ばれなかつた娘が、ではない。

いやでも王女の言いたいことを理解した国王は、笑つていいやら困ればいいやら、非常に悩んだのを覚えてる。

ティレドン騎士団長は二十五歳になる。

十年も前からその名を知られている騎士であり、国王によく似た大柄な体格と黒い瞳と髪を持つていた。家柄と容姿に恵まれ、武勇も優れているとあつて女性関係は非常に派手だが、内乱時代には頑として王座を拒み抜いた硬骨の人でもある。

そのバルロと、親族であるサヴォア家との間が、ここのおかしくなつてきているというのだ。

大貴族であるサヴォア公爵家は多くの同族を抱えているが、その中でも当主に匹敵するほどの大家たいかの主あるじとしてマグダネル卿という人物がいる。

エブリゴに広大な領地を構える大貴族であると同時に先代のサヴォア公爵の弟に当たる人物だ。

身代も大きく、現公爵の『叔父』でもあるだけに

一族の中での発言権も相当なものがある。

しかし、どれほどの大家の主だろうと一族の一員である以上、当主の意向には従わなければならないのが血族の掟である。

マグダネル卿も例外ではない。年下であろうと甥であろうと当主であるバルロを『目上』として、一応の礼をつくさなければならぬはずだった。

同様に、一家の長と言えども、バルロも『叔父』であるマグダネル卿を目上として立てなければならぬはずだった。

その二人の間が急速に険悪になりつつあるというのである。

マグダネル卿は以前からバルロに対して批判的な態度をとってきたが、この度はつきりと、

「一族の長たる資格なし」

と決めつけたというのだ。

容易ならざる事態である。

三年前の内乱時、終始国王の味方だったバルロと

違い、その母アエラ姫、そして問題のマグダネル卿など、一族の中でも力のある人々はどちらかと言うと反乱勢力に荷担する傾向にあった。

そのため、内乱が平定してからも両者の間で小さな諍^{いさか}いや感情の対立があつたらしいということは国王も承知している。

しかし、まさかそこまで険悪な状態になっているとは予想だにしなかった。マレバからの使いは、マグダネル卿との合戦はもはや避けられないとするバル口の決意を伝えに来たのである。

それもこれもマグダネル卿が、たびたび当主であるバル口を侮辱する発言を繰り返し、それだけでは飽きたらず、とうとうマレバを直指して挙兵の支度を始めたからだというのだ。

この知らせは即座にマレバに伝えられ、聞いたバル口は怒るでもなく平然と言ったらしい。

「つまり俺に殺して欲しいということだな」

報告した使者はその声音^{こゑ}に思わずすみあがった

そうだ。

「叔父上も謙虚な方だ。そんなに死にたいのならば、こんなまわりくどい手段を取らずとも俺の前に出て来て一言『家督を譲れ』と言えばよいのだ。その場で一刀両断にしてさしあげたものを」

むしろ機嫌よく言うのを聞いて、もはや何を言おうと主は止まりますまいと、ティレドン副騎士団長アステインは、悲痛な表情で国王に告げたものである。

「主は、身内のことで領内を騒がせることを陛下にお詫^わび申しあげると同時に、まことにお見苦しいものをお目にかけることになりませんが、家長であるバル口を軽んずるばかりか己がそれになり代わろうとするマグダネル卿を放置しておくわけには参らう、かくなつた以上は早急に片をつける所存だと、そのように申しております。私は主に代わりまして、私事で兵を起すことを陛下にお断りするために参上つかまつりました」

許可を得るのではなく、断るといのがいかにもバルロらしい。これは身内のことなのだから、口を出してくれるなというのだろう。

しかし、はいそうですかと黙っているわけにはいかない。国王はその場で詳しい事情をアステインに聞いたのだ。

長年バルロの側に仕えているアステインは常にバルロの忠実な部下だった。歳は三十の後半になっているだろうが、色白の整った顔立ちと淡い栗色の髪は実際の歳より十近くも若く見える。一流の騎士でありながら温和で控えめな性格で、気性の激しい主人を的確に補佐する名副官でもあった。

そのアステインが、国王が何を言ってもただ暗い顔で首を振るのみなのだ。

「陛下には誠に申し訳なく思いますが、かくなりましては私ごときが何を言ったところで無駄でございます。さほどに主の決意は固く、我倒れるか彼倒れるかの覚悟で出撃をする所存でおります」

「いかん。その出撃、俺が許さん」

珍しくきつい口調で国王は断言し、その旨をマレバに伝え、同時にマグダネル卿に事の子細を問い合わせた文書を送ったが、これと入れ違いになるようにマグダネル卿の使者が王宮に到着した。

誠に遺憾なことながら、余儀ない事情でマレバと一戦交えねばならなくなつた。その許しを得たいというのである。

国王は啞然とすると同時に、ほとほと呆れ果てた調子で使者に聞いたのだ。

「これはいったいどうしたことだ？ バルロは承知のとおり俺が従弟、またマグダネル卿はその従弟の叔父であり、王国の重鎮でもある方ではないか。何故この両人が争わねばならんのか、納得のいく釈明をしてもらおう」

これに対し、使者は抑えた口調ながらも、紛れもない憤りを感じている様子で、それもこれも問題はバルロにあるという。

三年前の一件をバルロはいまだに根にもち、何かにつけてマグダネル卿を粗略にする態度をとるというのだ。特に一年ほど前からはそれがますますひどくなつたらしい。

「確かにあの内乱においては、私は忠臣のとるべき態度を貫いたとは言えぬ」

と、マグダネル卿は述懐したらしい。

なにしろ国中が国王か、それとも反乱勢力の首魁であつたペールゼン侯かに別れて争つたのだ。

「あの折は侯の言い分が正しいように思えたればこそ、積極的に陛下をお助けすることはしなかつた。しかし、聞けばペールゼン侯は亡きドウルーフさま寵愛の女性を殺害し、幼い陛下の暗殺をも企てたという。それがわかつた以上、デルフィンニアの栄えある臣下であるこの身がなんで味方をできるものか」

この事実が世に広まるにつれ、あらためて国王に忠誠を申し出た貴族はマグダネル卿の他にも大勢いる。あまりにも論外の仕業だつたからである。そん

な者にいつまでも荷担して同類と思われてはそれこそたまつたものではない。

「陛下には過ちを犯した私を快くお許しください、心から感謝している。なればこそ以前の過ちを償う意味でも陛下とデルフィンニアのためになお一層の忠義をつくして参つた。ところが……」

バルロはいまだにマグダネル卿を許していないという。先日もサヴォア家の親族一同が会した折、バルロは叔父であるマグダネル卿を末席に追いやり、あの叔父を近くに寄せたのでは何をしでかすかわからないと、面と向かつて言い放つたというのだ。

四十八歳のマグダネル卿はこの侮辱に頭髪を逆立て、満面に血を上せていたと使者は語っている。

卿自身の言葉としては、こんな恥辱を受けて黙つていてはそれこそ騎士の名折れである。同時にこれ以上あの甥を当主として仰ぐことはわが身にはとうていかなわぬ。誠に申し訳ないが、私情で兵を起すことを何とぞお許し願いたいとのことだつた。

しかし、国王としてはとても許せることではない。国内でもそれと名の知れた人々が何という馬鹿な真似を、というのが国王の率直な感想だった。

マグダネル卿が勝てば卿には『当主殺し』の汚名が被せられることになるだろうし、同様にバルロが勝てば『叔父殺し』だ。

どちらに転んでもデルフィニアの利にならないことは明らかである。

「そこでな、いったい何が原因でここまでこじれたのか、いろいろ調べてみたのだが、どうもマグダネル卿の言い分のほうが正しいらしい」

「へえ？」

王女は意外そうな顔になった。

内乱の前から、この叔父と甥はあまりうまくいっていないかった。これは確かである。

父親の死によってバルロが爵位を継いだのは十八の時である。マグダネル卿にしてみれば武勇があつても当主となつてもその年齢の甥を子どもと思つて

も無理はないし、バルロにしてみれば、父の弟というだけで自分のすることに何かと口を挟むマグダネル卿を疎ましく思ったこともあつただろう。

だが、内乱後、マグダネル卿はバルロを名実ともに当主として立て、よく従っていたはずだった。にもかかわらず、当主であるバルロはマグダネル卿を嫌い、表には出ないながらもたびたび卿の顔を潰すようなことをしてのけたらしい。

相手が家長と思えばこそ我慢に我慢を重ねていたマグダネル卿だが、その堪忍袋の緒が先日の親族会議の一件でとうとう切れたというのだ。

「とりあえず俺が沙汰するまで構えて兵を動かしてはならんと兩人には申し伝えたが、このままでは間違ひなくマレバとエブリーゴの間で合戦になる」

王女は率直に驚きを示した。

「冗談じゃない。そんなことになつたら小競り合ひじゃすまなくなるぞ」

わずか十六歳の王女だが、戦女神の現うつしみ身とまで

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。